

MARGARET THATCHER

CONTENTS

Part-I

本誌独占 インタビュー

指導者の資質とは
8p

Part-II

期待された 強力な指導者

「ダウニング・テン」
奪回への道
12p

サッチャーはどうやって
世論を味方にしたか
14p

「世界秩序」の構築
16p

Part-III

サッチャー首相の 政治・経済改革

彼女はいかにして
英国病を克服したか
19p

英国病退治の
総決算
23p

英国と保守党の
繁栄を願って
25p

政治改革の次世代への
たいまつを掲げて
27p

今、日本では政治改革が議論されていますが、サッチャー前首相はその十一年の間、ひたすら内外の改革に取り組んできました。従来の保守党の政策から脱皮して、短期の政治・経済を大幅に刷新。また、フォークランド戦争では断固、国家としての筋を通し、ゴルバチョフを見出だして西側に接近、今回の「ソビエト革命」の基礎を作りました。今号は、英国を再生させ、新世界秩序をもたらした彼女の改革をたどってみました。



サッチャー前首相の軌跡

Part 1 サッチャー前首相 本誌独占 インタビュー

指導者の資質とは

強固な意志を持ち、 敢然と ことに当たる人

聞き手 日本経済新聞社編集委員 田勢康弘氏
撮影 織作峰子

決して妥協しない
信念に基づき実行

——一九八八年五月に、ホワイトハウス記者団のひとりとしてレーガン大統領に同行してロンドンを訪れました。その際、あなたの演説を聞く機会に恵まれましたが、私は偉大な指導者を持つ英国国民をうらやましく思いました。そこできょうは、政治家にとって必要な指導者の資質とは何かを、まずお聞きしたいと思います。

あのときレーガン大統領は、モスクワでの米ソ首脳会談の帰途に英国に立ち寄り、ロンドンのギルドホールで講演されたのです。そのあとで、私がお礼のご挨拶を申し述べたわけです。

私自身、あのときは実に感動し、感傷的にさなっていました。というの

も、これがレーガン大統領にとつては、最後のロンドン公式訪問になるのだらうということが、胸にせまつたからです。レーガン氏、ゴルバチョフ氏、そして私の三人は、実にうまく協調し合いい、世界を変えるほどの大仕事をなしとげてきました。レーガン氏と私は、まったく同じ政治哲学を持っています。あの演説でレーガン大統領は、ご自分の真情を吐露され、重大関心事のすべてを語られたのです。レーガン大統領こそ、まさに偉大な指導者の資質を備えた方です。

彼は、基本方針を貫き、理想を貫き通した大統領でした。産業界の活況、雇用の増大の実例を語るにも、決して「レーガン政権の実績です」とは言わず、「我が国では民間企業の自由競争によって、富と雇用の増大をはかっている」と言いました。

き、人々に語りかけることも必要です。それに関連して常に思い出すのは、スペース・シャトルが大勢の観客の眼前で打ち上げられた直後に、突如爆発し、宇宙飛行士たちが犠牲になった事故のことです。



「鉄の女」とは強固な意思の持ち主ということ」と語るサッチャー 女史

ことだと実感したのです。

——そういうレーガン大統領に多大な影響を与えたのは、むしろ、あなたのサッチャリズムではないでしょうか。

アメリカには、私が行ったのと同様な経済政策を信じている、親しい友人が何人もいます。名前を上げさせていたなくと、ミルトン・フリードマン博士。あの方は傑出した人です。FRB（連邦準備制度理事会）のポール・ボルカー前議長、そのあとのアラン・グリーンズパン氏も、議長になられる前からの友人です。

これらの人たちは、政策や助言を歪めることのない人たちです。皆、何をするのが最善かを知り尽した人たちなのです。政治の中にあつて、正確な情報をつかみ見極めると同時に、豊かな感受性を持ちながら判断の下せる人なのです。レーガン大統領も私も、こうしたよいブレインに囲まれて経済政策を展開してきたのです。

コンセンサスとは

——ところで、あなたはいわゆる「コンセンサス（合意）の政治」を批判しておられます。そこにサッチャリズムの神髄が現れていると思うのですが、その考えは何をきうかけに、いつごろからお持ちになったのでしょうか。

「コンセンサス」という言葉が、現在のよき意味で使われだしたのは、比較的最近になってからです。私が政界に入ったころは、決して使われない言葉でした。保守党は常にいくつかの基本方針の上に立脚していました。そしてこの基本方針を、政策に練り上げ、実行に移していったのです。したがって他の政党のところに行き、「そちらの

ご意見は私どものと違うようなので、ひとつ妥協点を探しませんか」というようなことはあり得ませんでした。

もし、自分の意見を持っていないければ、何を信じることもあり得ないわけです。コンセンサスというのは、異なった意見全部の折衷案のことです。もし、すべての人が信じていることがコンセンサスだとすれば、コンセンサスをとる必要はないわけです。

例えば、人権を大事にする理由を説明するとします。人はそれぞれ唯一無二であるから人権は尊い。そして、私たちは自分の行動を自分で決める権利があり、同時に自分の決断に責任を持たなければならぬ。そのような基本的権利、人間の尊厳が認められる権利は、いかなる政府も奪ってはならない、などと説明し、それから「皆さん、この政策に賛成してください」と言った場合、そこにはいわゆるコンセンサスはありません。しかし、正しいほうを目指しているという感覚はあります。

別な例を上げますと、四十数か国の首相や大統領が参加して開かれたある英連邦首脳会議のことですが、いくつかの点で皆の合意に達することができませんでした。そのとき、誰かがコンセンサスが必要だと言ったのです。

そこで私は、コンセンサスという言葉は何を意味するのか分からないと言いました。私の欲しいのは同意です。

すると、私の同僚の一人が「コンセンサスというのは、合意に達することができないことを指すのだ」と言ったのです（笑い）。

しかし、コンセンサスを大事にしなうとすると、何ごとにつけ妥協をしな



にこやかに記念撮影（右が田勢氏）



ゴルバチョフを見出し、世界に紹介したのも、彼女の偉大な業績

私が育ったころは、まだテレビがありませんでしたから、自分たちで楽しみを作り出していました。小さなときから歴史や政治に関心を持っていましたので、父とともに伝記や歴史、歴史小説などの本を読んで育ちました。読んで、読んで、読みまくったのです。そして、大学教授の講演会が開かれれば聞きに行き、講演のあとの議論にも参加しました。有名な音楽家が来ると聞きに行くという生活だったのです。そういうわけで、知らず知らずのうちに父の影響を受け、何であれ話し合い、本を読んでは議論をしました。その中で、自然に政治に興味を持ったのです。例えば、あなたはなぜジャーナリストになられたのですか。それは何かがあつて、自然にジャーナリストという仕事に親しみを感じたからではないでしょうか。ある人は俳優になり、ある人は音楽家になる。私にとっては、それが政治だったのです。

——最後に日本の役割について、お聞きしたいのですが。

日本は唯一の民主国家として、太平洋地域で大きな役割を果たしています。民主主義や経済政策の成功例として、極めて重要です。だからこそ日本は、冷戦時代にも、共産主義に打ち勝つことができたのです。日本は戦後に復興をはじめ、努力を重ねて経済的な繁栄をなしてきてきました。日本にできたのだから、ほかの国にもできるでしょう。

しかし、よい政府の下でないとい経済的繁栄はありません。よい政府というのは、何もかも手を出そうとはしない政府のことです。本来の政府がなす

たせ やすひろ 一九四四年生まれ、早稲田大学第一政経学部政治学科卒。六九年日本経済新聞社入社。八五年ワシントン特派員。八七年ワシントン支局長。八九年東京本社政治部長兼編集委員を経て、政治部兼経済解説部編集委員。著書に『豊かな国の貧しい政治』（日本経済新聞社）、共著『政府とは何か』（自民党政調会）ともに日本経済新聞

べき防衛や健全な財政、産業経営などについて、政府は必要な法の整備などに努めるべきです。

日本の経済発展は目を見張るほどで、日本にだけは民主主義が根をのびています。もちろん、韓国も追いつけていますが、私たちの関心は中国です。ソ連はまず政治的自由を手に入れた、それから経済的自由化に乗り出そうとしています。そして、このほうがはるかに困難であることに気づきはじめていくところです。

一方、中国はまず経済的な自由を手に入れました。通商の経験を積んでいたからで、商売で身を立って貿易をはじめたのですが、政治的な自由化が後回しになっています。いずれにしても、中国は民主主義を目指すことを確信しています。そこで、日本が中国や韓国にいい影響を与えることを期待しています。

その意味で、日本がアジアの中で大きな役割を果たし発展することが、世界の繁栄につながるのです。

——日本にはたくさんさんのサッチャー・ファンがいます。私もその一人で、お目にかかれて光栄でした。

懐かしい私の写真をたくさん入れた特集（りぶる9月号）を組んでいただけで、ありがとう。

ゴルバチョフ夫妻と親交を深めた寒い日曜日

——ところで、ゴルバチョフ氏を西側各国の首脳と結び付けたのは、皮肉なことに、かつてソ連から「鉄の女」と呼ばれた、あなたでしたね。

「鉄の女」というニックネームは、決して悪くないですよ。強固な意志の持ち主だということですから。

私は常に先を見て歩いていきます。現在には首相ではありませんが、次の世代のためにも、以前にも増して先を見るようにしています。それで、一九八三年の総選挙のときに、私はソ連に新しい指導者がまもなく誕生するだろうと

日本はコンセンサスを大切にしていられようが……。——日本の政治はあまりにも基本原則がなく、どうもコンセンサスが中心だという批判があります。日本国民も非常に悩んでいるわけですが、現実にご覧になって、いかがお感じでしょうか。

日本の二大政党は、政策の違いが非常に大きいようです。自民党の基本方針は民主主義、自由貿易、健全財政、教育の機会均等などで、富を生み出すのは政府ではなくて、自立する機会を持った人々であるという認識、家族に対する責任感などが強いですね。

一方、社会党は極めて唯物論的な信条に基盤を置き、計画に専念し、産業計画を立て、そしてあらゆる合意を取り付け、消費者の要求は考えない。消費者運動の立ち入るべきがない。こういう基本方針の違いが、反映しているのではないのでしょうか。



「同じ政治哲学を持つ 偉大な指導者、レーガンとサッチャー」

いうことを知りました。ブレジネフ政権から短命で終わったアンドロポフ政権へ。そしてまた、次の指導者へと世代の交代が行われる状況でした。

そこで私は、新世代の政治家を見つける努力をするべきだと思い、私たちの意見をソ連側に伝えたのです。そして最初に出会ったのが極めて興味深い人物、ゴルバチョフ氏だったのです。指導者を個人的に知ることは、何トンもの本を読み、講義を聞くよりも効果的です。

彼は、一二月のある日曜日にやってきました。イングラッド中東部にある

英国首相の別邸チェッカーズにきたのです。そこは素晴らしい田舎の館で、心休まる場所です。外は寒いのですが、家の中は大きな暖炉が燃えていて暖かく、ゴルバチョフ夫妻も家に入ると打ち解けた雰囲気になりました。

私たちは話しているうちに、次第に信頼関係に達しました。こういう経験もあつて、私はどんな仕事についていてもある種の直感と、感覚を持つべきだと思いました。それからゴルバチョフ氏との付き合いが始まったのですが、それが極めて実り多い結果をもたらしました。ですので私はレーガン大統領

に自分の考えを伝え、世界に向かって彼はともに仕事ができる相手であることを発言してきたのです。

一緒に仕事をするならば、強固な意志を持ち、敢然とことに当たる人に限ります。しかし、そのゴルバチョフ氏も先人たちと同様、変化を欲しない人たちにしばしば引き戻されています。彼自身は、保守的な人たちがこそ変わるべきだと訴え続けているのですが……。

——個人的なことをおたずねしたいのですが、政治家を目指すようになったのは、グランサム市長をつとめた父アラルフレッド・ロバーツ氏の影響が大きかったのですか。

ば増えるほど国家の負担が多くなる。
 だからできるだけ子供を作らないよう



多くの支持者を得ていたヒース首相だったが……



英国議会の下院本会議場。ここで政権党と野党の激しい論戦が繰り広げられる

下院議席数と総選挙勝利党党首

	労働	保守	首相
1945	393	213	アトリー(労)
1950	315	298	アトリー(労)
1951	295	321	チャーチル(保)
1955	277	345	イーデン(保)
1959	258	365	マクラミン(保)
1964	317	304	ウィルソン(労)
1966	363	253	ウィルソン(労)
1970	287	330	ヒース(保)
1974(2月)	301	296	ウィルソン(労)
1974(10月)	319	277	ウィルソン(労)
1979	268	339	サッチャー(保)
1983	209	397	サッチャー(保)
1987	229	375	サッチャー(保)

「政治経済」(研数書院)より

PartII 期待された 強力な指導者

栄光への階段

「ダウニング・ テン」 奪回への道

自らの信念を貫き、断固とした政策を
 実行して、新しい政治の流れを英国に
 もたらしたサッチャー前首相。その首
 相の座を得るための党首選立候補も、
 偶然のチャンスからでした。が、それ
 も「運がよかった」のではなく、その
 チャンスを生かし花を咲かせたのは自
 らの努力があったからなのです。





を ン た



戦線から戻ったサンドリュー王子を艦上へ迎へ エリザベス女王

首相は、死者が増えるにつれ、好きなブルーの服を着なくなり、喪服に近い黒い服を着るようになりました。もう一つ、彼女は戦死者が出るたびに、その遺族に自筆の手紙を書き続けたのでした。

ハイテク兵器で互いに武装した軍隊の戦争はすさまじいものです。この先どれほど戦死者が出るかわからない。そんなサッチャー首相の心痛を支えたのが、指導者としての責任感でした。英国にはもともと「ノブレス・オブリージュ（高い身分に伴う義務）」という言葉があります。第一次大戦の際、ケンブリッジとオックスフォード両大学卒業生の多くが戦場で戦死しました。これは率先して部隊を指揮したため、これによって英国は戦後多くの人材を失い国の再建が大変だったと言われたほどです。サッチャー首相も、今こそこの義務を発揮すべきときだと考えたのでした。

フォークランド戦争は、六月一四日にポートスタンリーのアルゼンチン軍の降伏で終わりました。英国軍の戦死者は二五〇名、負傷者七七〇名に上りました。しかし、戦争の苛烈さを考えれば奇蹟的に少ない犠牲者だったのです。フォークランド紛争の勝利によって英国のナショナリズムは高揚しました。そして、最大の勝利は、戦争を決断しやりとげたサッチャー首相が得たのです。これをきっかけとして、あれほど執拗だったサッチャー批判が消えてしまったのです。

英国国民は、フォークランド戦争で見せたサッチャー首相の決断と成功を、ほかの政策の実現にも期待したので

フォークランド奪回戦争 サッチャーは 世論をどうやって 味方にしたか

英国とアルゼンチンの間で戦われたフォークランド戦争。そこには英国の改革を追求する、首相としてのサッチャー女史の資質、強力な指導力が最も鮮明な形で現れています。そして、それが戦争の勝利に結び付き、彼女の政治生命を確固たるものにしたのです。

国家の威信を守り 断固たる姿勢

英国の世論を一変させる事件が起こったのは、一九八二年四月のことです。南アメリカ最南端の国アルゼンチンと英国は、アルゼンチンの海上約五〇〇キロの南大西洋に浮かぶフォークランド諸島の領有をめぐる、一五〇年間争ってきた。

この地域に関心を持つ英国は、一八三三年にフォークランド島に艦隊を派遣して、この島に住み着いていたアルゼンチンの人々を追出し、代わって英国人の入植者が島に入り今日にいたっていたのです。

しかしアルゼンチンは、フォークランド諸島はあくまで自分たちのものであると主張し続けてきました。一方、英国の領有はすでに一〇〇年を越え、国際法の上からも領有権は自分たちにあるとして対立してきたのです。

サッチャー政権は一九八一年の緊縮財政によって、南大西洋に常駐する唯



フォークランド諸島から、兵士を乗せて凱旋す 客船キャンベラ号

一海軍艦艇、砕氷パトロール艦の「エンデュラス」をこの海域から引き上げると発表。それがアルゼンチンの軍事政権を勢いづかせる結果となりました。アルゼンチンのガルチエリ大統領は、進行するインフレなど悪化する国内情勢から、国民の関心を外に向けるためにも、フォークランド諸島奪回をかつこうの目標と考えたのです。

一九八二年三月二十六日、フォークランド諸島（アルゼンチン側によればマルビナス諸島）の一つ南ジョージア

島が、アルゼンチンの海兵隊によって占領され、四月二日には、空母、駆逐艦、揚陸艦から成るアルゼンチン海軍がフォークランド島を攻撃、兵を上陸させて首都ポートスタンリーを奪取したのです。英国側の守備隊はわずかに三三名で、成すすべもなくハント総督は降伏しました。

アルゼンチンが、フォークランド奪回の動きにでるのではないかという情報、英国政府は持っていました。それがこれほど早く現実のものとなるとは思っていなかったのです。

もとより外務省や国防省は、軍隊の派遣には消極的でした。フォークランド諸島が英国本土から一万三〇〇〇キロも離れており、艦隊を派遣するのが軍事的に難しいこと。さらに、わずか一八〇〇人の住民のために、艦隊を派遣するのが妥当かどうか、はたして国家の威信をかけるに値するかどうかの点で、大いに疑問があるというのが彼らの意見でした。

そんな中で、サッチャー首相だけは最初から艦隊を送るべきだと考えたのです。国家の威信が傷つけられた時には、戦争に訴えてでも威信を守らなければならないというのが、彼女の信念でした。ただ、はたして南大西洋の新たな艦隊を送りこむことができるのか、その上でアルゼンチンとの間で全面衝突になったとき、英国軍は勝てるかどうか問題でした。

この点については、リーチ海軍作戦部長が「それは可能だ」という判断をサッチャーに具申したのです。これで彼女の腹は決まりました。

情報、決断そして 危機管理の冴え

フォークランド戦争ほど、政治家サッチャーの資質を明らかにした出来事はありません。彼女はもとより軍事には素人ですが、事にあたって誰の意見を尊重すればよいかをよく心得ていました。

初めにできる限りの情報を集めて決断を下すと、どんな事態が生じてもひるむことなく初志を貫徹する。そしてそのためには専門家を巧みに起用して、目標に向かって難局を切り抜けて行くのがサッチャー流のやり方です。

フォークランド島陥落の報が伝えられた翌日の四月三日、この日は土曜日にもかかわらず、サッチャー首相の要請で下院議会が開かれました。しかしあえて開いた議会は政府追求の場となっていました。

野党は、アルゼンチンの動きを事前



熾烈なECとの 確執

サッチャー首相にとって東西関係以
上にやっかいだったのは、同じ西側に
属する大陸ヨーロッパの国々、とりわ



ラジオを通じて外交政策を語るサッチャー首相



く難は



テ
には決し

。銃を
っ

しか、軍服を着て、その場に立って、

ゴルビーを見出した サッチャーの慧眼

Par II
期待された
強力な指導者

サッチャーの外交政策 “世界秩序”の 構築

サッチャー前首相は英国内だけではなく、国際政治の舞台でも大きな影響力を發揮しました。他国に対しても言うべきことは、はっきりと言う。EC統合という趨勢の中で、また、湾岸戦争のときも一貫して、毅然たる姿勢を示しました。その一方、ソ連のゴルバチョフ氏を早くから認めるといった、先見の明も持っていたのです。





「ドライ派」と「ウェット派」

一九七九年の総選挙を前にして、サッチャー女史は自分のことを「合意を重視するタイプの政治家ではなく、自分の思ったことは貫き通す信念の政治家だ」と語ったことがあります。総選挙で勝った保守党の党首サッチャーが首相になって、英国国民は信念にもとずく大胆な政治が展開されるものと期待しました。

しかし、第一次サッチャー内閣の顔ぶれは、かつてのヒース内閣のときと大して変わりはありませんでした。閣僚は全部で二人でしたが、キャリン・トン外相、ホワイトロー内務大臣、ピム国防大臣、ソームズ枢密院議長などは、従来から保守党の中核を形づくる伝統的な地主が富豪の出で、ヒース内閣でも閣僚をつとめたベテランたちでした。

サッチャー首相は組閣に当たって、宣言とは別に、自分と考えるを同じくす

る新鮮な人材を登用するよりは、保守党の調和を選んだのでした。党内の権力基盤がまだ弱い彼女にとっては、やむを得ない選択でした。また、これまでに教育相をつとめただけという経験を考えれば、どうしてもベテランの協力が必要だったのです。

やがて世間は、サッチャー首相に忠誠を誓う閣僚たちを「ドライ派」と呼び、従来からの伝統的な保守主義者で、サッチャー路線に批判的な人々たちを「ウェット派」と呼ぶようになります。「ウェット」という形容は、サッチャー首相の政策にさまざまな理由で反対する人を指すのですが、その反対の仕方が、名門のパブリック・スクール出身者特有のひ弱なものであったために、こう呼ばれました。

つまり、「ウェット」には、サッチャー革命が要求する厳しい決定についていけない者、それを実行する強固な意志に欠ける者といった響きが込められています。そして、この区別に従えば、船出したばかりのサッチャー政権は、ウェット派が有力なポジションを占め



第1次サッチャー内閣の顔ぶれ。ウェット派の閣僚を多く抱えながらの船出だった

PartIII サッチャー首相の 政治・経済改革

サッチャー政治の展開 彼女はいかにして英国病を克服したか

社会・福祉政策に重点を置きすぎたために、「英国病」とまで言われるほど瀕死の危機に陥っていた英国経済。それをみごとに蘇らせたのが、サッチャー前首相です。彼女はまず、緊縮財政で小さな政府を目指し、国営企業の民営化などで、自由競争の活発化を実現させました。



NATO(北大西洋条約機構)の首脳会議で。ここでは積極的だったが、EC統合には一線を画した

利を持ち、独自の政策を追求すべきであって、国家の枠を越えた政策をブリュッセルにいるEC官僚の自由にはさせないというわけです。

「女王陛下の肖像のない紙幣など使えない」というのが彼女の口癖で、こうした点では、サッチャー首相は骨の髄からの民族主義者なのです。

もう一つの不満は、フランス、ドイツ、スペインなど大陸ヨーロッパの国々は、国家が社会政策に強く介入する傾向があり、加えて社会民主主義者が政権の座にあたり政治的に強い力を持っているため、社会福祉優先の政策をとっています。これはサッチャー政治が目指すものと、およそ反対のもので、す。こうしたところにも彼女とECとの確執の原因があります。

一九八八年、サッチャー首相はベルギーのブルージュにあるECの官僚を養成する「ヨーロッパ大学」で演説し、EC統合がこれ以上進展することを批判しました。すると翌年、同じ大学で今度はECのドロール委員長がサッチャー批判を展開し、「国家主権」をめぐる二人の考え方の違いが浮き彫りになりました。

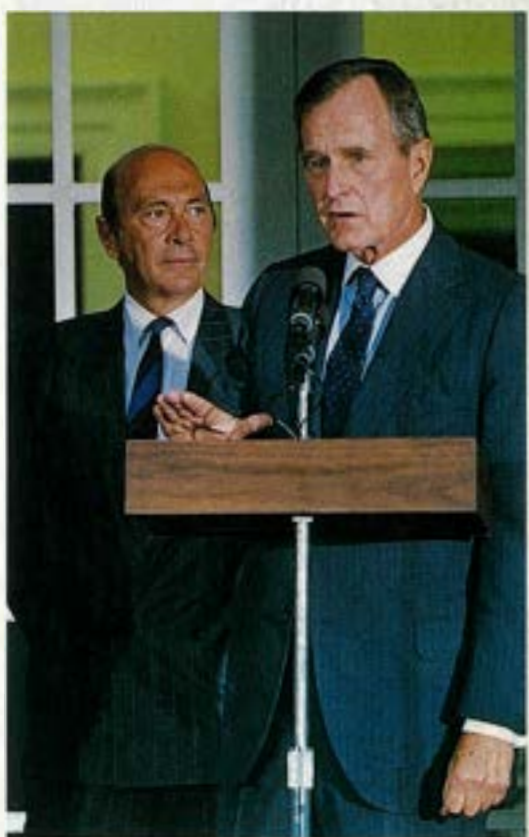
英国はヨーロッパ統合論者にとって煙たい存在で、彼女が政権の座を降りたときは、ブリュッセルのEC官僚は、密かにシャンパンで乾杯したという事です。

サッチャー首相が一貫して外交の柱にすえたのは、アメリカとの同盟関係です。特にレーガン大統領とは、同じように「小さな政府」を目指し、さらに外交の点でも、東側との対決姿勢を前面に押し出した点でも共通しており、

「ブッシュを決断させた
アスペン会談」

レーガンに代わって登場したブッシュ大統領とは、昨年の夏に湾岸危機が起こって以来、親密の度を加えました。その典型的な例が、イラクがクウェートに侵攻した日から二日後に行われたアメリカのコロラド州アスペンでの会談です。

この日ブッシュ大統領は、ここで防衛問題についての演説をすることになっていましたが、その前に二人は話し合っていたのです。この時、サッチャー首相は、いつも持っている大きなハンドバッグを腕の下にかかえると、ブッシュ大統領としっかりと握手し、「ジョージ、知っているでしょうが、彼、サダム・フセインはやめはしないわよ」と言ったということです。二人は駐英



さすがのブッシュ大統領も、サッチャー首相の強い進言で決意を固めた

アメリカ大使の別荘であるカトー邸で、中東情勢について話し合いました。この席でサッチャー首相は、ブッシュ大統領に対して断固とした態度をとり、国連を通じて広範な国際的動員を行うよう進言しました。

ある証言によれば、彼女はサダム・フセインについて、かつて保守党のイーデン首相がスエズ動乱のときのナセルをヒトラーになぞらえたのと同じような表現を使ったと言っています。

サッチャー首相の影響は、どれほど大きかったか。二日後にブッシュ大統領は、サウジアラビアのファハド国王に電話をかけ、「閣下、ご存知でしょう。彼、サダムはやめはしませんよ」と説得したのでした。ブッシュ大統領はサッチャー首相の言葉を、そのまま用いたのです。

サッチャー首相はブッシュ大統領に協力するため、率先して軍隊を多国籍軍に参加させ、以後の湾岸戦争の勝利に大きな役割を果たしたのでした。



こうした政策に対して、これは裕福な階級を優遇するものだという反対の声が、労働者を中心にあがりました。しかし、サッチャー首相はそうした声にもかかわらず、信念とする政策を次々に実施に移したのです。

最初の内閣では、公務員十五万人の整理、教育費の抑制が行われ、競争力のない企業や地域の振興のための援助金は三年間停止され、国民健康保険サービスの拡大の停止などの措置がとられました。さらに国営企業の民営化も行われ、英国航空、石油公社ブリティッシュ・ペトロリアムの一部も民営化され、二年前労働党内閣によって国営化された英国造船も再び民営に戻されました。民営化はこの時点ではまだ、のちに展開されるような全面的なものではありませんでしたが、そのレールはこのとき敷かれたのです。

経済を建て直し、「小さな政府」のもとで自由競争を原則とする社会を出現させようとしてサッチャー首相がとった措置に対して、野党の労働党はもと

批判の嵐に 抗しながらも、 経済改革に 大ナタをふるう

その一方で勤労意欲を高めるための減税も実施され、所得税の最高税率は六〇％に抑えられました。その代わりに、付加価値税(VAT)は、一五％にまで引き上げられました。付加価値税は、一般の物品にかかる税で、日本の消費税にあたります。



大幅に公務員を整理する一方、警察官と軍人の給与は引き上げられた

より閣内からも批判が出されました。大幅な予算削減により、失業者の増大と産業基盤が弱くなるという懸念からです。最も強く批判したのはブライア雇用相で、このほか閣僚のギルモア、ウォーカー、ソームズ、キャリントンなど、いずれもヒース前首相の流れをくむウェット派の面々でした。

もともと英国の首相は、大臣の中の首席にすぎないと言われてきました。首相はなにがとも内閣の意見に沿う形で行動するのがよいとされ、従来はそれほど強い権限を持つ存在ではなかったのです。

こうした政治のありかたを「責任内閣制」と呼んで英国政治の伝統としてきました。しかし、英国の憲法は慣習法で明文化されているわけではありません。これと同じように首相の権限についても、あくまでも慣習に則って運用されるのです。

サッチャー首相がこれまでの慣行以

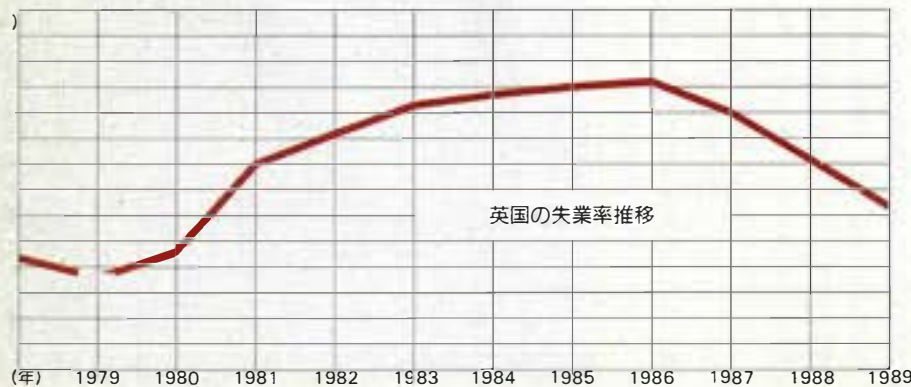
上に強力なリーダー・シップを発揮してきた背景には、そうした仕組みがあります。重要な政策、特に経済政策については、経済関係の主要な閣僚で構成される「E(経済・エコノミー)の頭文字」委員会」が毎週火曜日に開かれてそこで討議され決定されるならわしでした。

しかし、サッチャー首相は独自の政策を遂行するために、あえてこの慣行を無視して、自分の主導で経済政策を決定することにしました。その結果、閣僚は自分の所管のことからについてだけ発言を許されるということになりました。サッチャー女史が強力な指導性を発揮したのです。

こうした強権の発動を批判されたサッチャー首相は、あるとき「女性はもとと財政能力があるのよ。苦しい家計をやりくりしてきた女性なら、国家予算にも通じるはずよ」と批判をかわしました。



経済改革、失業率削減を目指し、日本企業の誘致にも積極的だった(日産の工場で)



サッチャー首相はまず、社会の建て直しに取り組んだ



ていたこととなります。

それでも政権をスタートさせるや、サッチャー首相は数少ないドライ派のハウ蔵相、産業相として入閣したジョーゼフ氏などの力を借りて、自分の信念の具体化にとりかかりました。それは当時「英国病」とまで言われた福祉偏重の政策に大ナタをふるい、自由競争社会の実現を目指すのです。

彼女は、英国の経済を活性化するには、「マネタリズム」にもとづく緊縮財政を組んでインフレを退治する以外にないと考えていました。「政府が必要とする財政資金は、天からは降ってきません。税金か政府の借金しかないのです」とサッチャー首相は語っています。こうした信念のもとに最初の予算が編成されたのが、一九七九年の六月でした。

予算削減を提案した大蔵官僚も仰天

サッチャー首相の新政権が目指したのは、経済の自由化と国家の権威を回復することでした。そのためにとった政策、法と秩序の回復、強力な防衛力の整備、減税、国営企業の民営化、公営住宅の払い下げなどは、どれも選挙で公約したものばかりでした。

就任直後、まず彼女が手がけたのが、軍人と警察官の給与引き上げでした。引き上げ率は、それぞれ三二％と二〇％という大幅なもので、これによって社会秩序を回復し、さらに強い軍隊を持つて外交に当たるというサッチャー路線の最初の現れでした。

この給与引き上げは、当然のことな

がら彼女が掲げる緊縮財政と矛盾しますが、英国社会の建て直しの根幹であるとして実施されたのです。その代わり、他の部門での予算の削減は実に思い切ったものとなりました。

予算の原案を作ったのは、大蔵官僚を指揮したハウ蔵相です。内閣にあつて数少ないサッチャー派であるハウ蔵相は、サッチャー首相の政策をよく理解しているつもりで、五億ポンドの削減を提案しました。しかし、首相はそれでは少なすぎるとして、さらに大幅の削減を命令したのです。

驚いたのは、原案作成に当たった大蔵省の役人たちです。彼らがぎりぎりにつけた原案に対して政治家が注文を

つけ、最終的には原案よりも膨らんだ予算が作られるのが世界の常識で、英国でもこれまでは例外ではありませんでした。ところが、サッチャー首相は大蔵原案では削減の幅が足りない、もっと大ナタをふるうように命じたのです。

結局、サッチャー内閣の最初の予算では、公共支出の削減額は三五億ポンドに達しました。これは当初大蔵省が考えた額の実に七倍でした。それによってインフレを抑制しようというもので、インフレ退治が政権の最優先事項とされました。

これは緊縮財政を実行しようというサッチャー首相の決意の現れですが、



英国病を退治するため、次々と異例の新政策を発表した



政府批判のデモ隊が警官隊とぶつかり、騒乱状態になることもしばしば。それだけ英国病の根は深かった

PartIII
サッチャー首相の
政治・経済改革サッチャー政治の展開②
英国病退治の
総決算

1つ間違えば経済の破局を迎えかねない大ナタをふるい、奇跡とも言える英国経済の大改革をサッチャー前首相は行いました。労働組合との対決、教育、地方自治、国营企業の民営化など、大ナタはさまざまな分野に振り降ろされました。だが、そこには「やる気を起こさせる」という精神が、一貫して流れていたのです。

宿敵の労働組合を
打倒

フォークランド戦争に勝利した翌一九八三年の六月、サッチャー首相は総選挙に打って出ました。選挙の結果は保守党が三九七議席を獲得、二〇九議席の野党労働党に圧勝しました。こうした支持を背景に、第二期のサッチャー政治がスタートしました。彼女がまずやったことは閣僚の入れ替えて、ウェット派を切り、サッチャー路線に忠実なドライ派を多数起用したこと。外務大臣のハウ、蔵相ローソン、内相ブリタン、雇用相デビッドといった人たちが、彼らは以後長年にわたってサッチャー政権を支えることになりました。

こうして閣内を固めた首相は、第一期でやり残した改革に、さっそく手を



産業の合理化、近代化を目指し、あらゆるところに大ナタをふるった

つけました。労働組合対策、国营企業民営化の徹底、それにとまなう株主の大衆化、教育制度の見直しといった課題です。中でも「英国病」の原因とされた労働組合との対決に、彼女は精力を注ぎました。当時、英国労働界を牛耳っていたのは炭鉱労働組合で、委員長のアース・スカーギルは、名前をもじって「アースー王」とあだ名されるほどの権力を誇っていました。首相に就任した直後の一九八〇年の炭鉱ストでは、その力をいやというほど痛感させられたサッチャーは、炭鉱労働組合との対決に備えて着々と手を打ちました。まずストが長期化するのに備えて、石炭の備蓄を増やし、その上でアメリカで実業家として成功した辣腕の実業家イアン・マクレガー氏を石炭公社の総裁にすえて、石炭産業の合理化に乗り出したのです。マクレガー氏の背後にサッチャーの

苦境にあつても断固
として初志を貫徹

しかし、サッチャー首相の経済政策はたちまち危機にさらされました。一九八〇年になると、失業者は二〇〇万人を越え、インフレ率は二一％に達しました。職を見つけれない若者は不満のはけ口をもとめて暴走し、サッカークラブのなかには乱暴を働くものが続出、「フリーガン」として社会問題にまで発展しました。フリーガンというのは、もともとロンドンに住んでいたアイルランド系の一家の名前で、彼らが乱暴者ぞろいだったことから、一般に乱暴者を意味し、その後とくにサ

ッカー場で乱暴狼藉をはたらく若者たちをこう呼ぶようになりました。サッチャー首相は、もともとサッカー嫌いといわれますが、このフリーガン騒動以来その傾向にますます拍車がかかったと言われます。

一九八〇年から八一年にかけて、ロンドンをはじめブリストル、リバプール、マンチェスターなど斜陽産業を抱えた都会では、各地で暴動が起き、労働者と警官隊との間で衝突が繰り返されました。サッチャー女史が尊敬する保守党の長老マクミランも、「過酷な政治は産業を破壊する」と警告、サッチャーのライバル、ヒース前首相は議会で「政策を変更しなければ不況は悲惨な結果になる」と政策の変更を迫りました。世論の支持も下がりはじめ、就任当初四一％あった支持率は、一九八一年末には二五％にまで落ちこみました。

それでもサッチャー首相は、断固として初期の政策を貫いたのです。かつて女性週刊誌とのインタビューで、「私だって夜中に一人ぼっちになれば泣くことだってあります。本当は感情を持った人間です」と語ったことがあります。しかし、こうした苦境にあっても絶対に弱気は見せませんでした。

一九八一年十月の党大会の前に大幅な人事の刷新をはかり、党内はサッチャー女史のこの断固とした姿勢を受入れたのでした。

一九八二年になると、緊縮政策の効果が現れはじめました。インフレ率は一〇％を切って、一桁台となり、工業の生産性も向上となり、これにつれて支持率も回復しはじめました。

メイジャー首相と立ち話をするその姿は、我が子を気遣う母親のようでもある（今年五月）



ダウニング・テンから去るサッチャー首相

PartIII
サッチャー首相の
政治・経済改革

サッチャー政治のフナーレ 英国と 保守党の繁栄を 願って

苦があるからこそ、楽がある。だが、政治ではときとして、初めに苦勞をかけざるを得ないことがあります。それを国民にどれだけ理解してもらえるか。サッチャー首相が退陣するきっかけの1つに、その問題が大きくのしかかっていたのです。

退陣の引き金と なった人頭税

日本の政界には、「政治の世界は一寸先は闇」という至言がありますが、一九九〇年末の英国の政変劇もまさにこの言葉を地といった感があります。著名な作家でもある側近のジェフリー・アーチャー氏は、今度の政変劇の最中、



退陣後のテレビインタビューでは、こんな場面も

ずっとダウニング街一〇番地の首相官邸に詰めていました。いよいよサッチャー女史が辞任を決定したとき、官邸の中の廊下で、インガム報道官とすれちがった際、「この政変は小説でも書けないだろう」と語ったといひます。英国の政界の裏の裏まで知っているジェフリー・アーチャー氏にとってすら、予想外の出来事だったのです。

ことの発端の一つは「人頭税」の導入でした。人頭税は住民税の俗称で、住民一人一人から税金を徴収するため、そう呼ばれます。サッチャー首相が、多くの反対の声を無視してこれを導入したのは、昨年の四月のことでした。これまでの地方税は、土地や家屋など不動産所有者に課税する固定資産税で、



道端には、退陣を惜しんで置かれたプレゼント

これに対して、自治体側もさまざまな抜け穴を作り、収税を上げて対抗しました。こうして両者の対立は決定的となり、サッチャー首相は一九八三年の選挙公約に、大ロンドン市など六つの大都市の自治体を廃止する政策を掲げ、さらに交通行政のような自治体の機能のいくつかを、地方の手から中央政府に移すことにしたのです。

大都市の自治体と議会の廃止には激しい抵抗があり、政府は大いに手を焼きました。結局一九八六年には、大ロンドン市の議会をはじめ、バーミンガム、マンチェスター、リバプールなど七つの自治体が廃止されました。

その後、学校と公営住宅についても地方自治体の関与を減らすような政策が採られたのでした。

「サッチャーリズム」の本質は、国民の多くを私企業で働かせ、自社の株を持たせ、自分の持ち家に住まわせる。そして、福祉や教育、地方行政のサービスについてもできるだけ自己負担、自助努力にまかせるというものです。そうすれば、人びとは必ず自立心を持って、やる気を起こすというのが彼女の信念でした。

『さあ寝て下さい。面倒を見てあげますからね』という看護婦と、『さあしやんとして。きのう手術をしたのは分かっています。でも、床に足を降ろして、歩いてみましょう』という看護婦と、どっちがいいの？」

これは、緊縮財政を批判した労働党に対するサッチャー首相の反論ですが、こうした考えが徹底されたのが、国営企業の民営化です。

サッチャー政権は、まず国営企業に対する監督権を使い、国営企業の収益性を上げて魅力を回復し、その上で民間に売り出す方法を採りました。こうして、一九八二年から八七年までの間に、通信を一手に行うブリティッシュ・テレコムや、ブリティッシュ・ガスなどが次々に民営化されました。

こうした民営化は、政府の歳入を増やしただけではなく、企業の効率を上げ、さらに株主の数を増やして資本主義の大衆化に大きく貢献したのです。そして、これら企業その後の業績は、この「サッチャー革命」が間違っていないことを示しました。

痛恨の四票

もう一つは、経済の運営方法をめぐって首相とローソン蔵相の意見が対立、ローソン蔵相が十月二十六日に辞任し

上地方自治体の改革に伴って廃止された、大ロンドン市の市庁舎
(下)石油メジャーの一つであるブリティッシュ・ペトロリアムも、国営から民営へと変わった



民営化で保守党 支持者を拡大

「サッチャーリズム」の本質は、国民の多くを私企業で働かせ、自社の株を持たせ、自分の持ち家に住まわせる。そして、福祉や教育、地方行政のサービスについてもできるだけ自己負担、自助努力にまかせるというものです。そうすれば、人びとは必ず自立心を持って、やる気を起こすというのが彼女の信念でした。



「行の総裁になればいい」とい
発言をしたのですが、サッチ

T

政治

最後までユーモアを
忘れず

PartIII
サッチャー首相の
政治・経済改革

サッチャー以後

サッチャー女史は、次の総選挙には出
ず、議員生活に終止符を打つことを表
明しました。英国では小選挙区制を採
用しており、責任ある政党政治を行う
には最適なシステムとして、長い間機
能しています。サッチャー女史が11年
間にもわたって、強力な政権を維持で
きたのも、実はこの小選挙区制による
ものと言えるでしょう。

選挙区の党員集会
で後継者を決定



地元のフィンナリー選挙区で、支
れて



総選挙のキャンペーン。もう2度とこの姿は見られない



メイジャー氏の勝利宣言後、官邸の窓からさっと見守るサッチャー女史

11月号 特別企画第3弾！ サッチャー女史 訪日特集

のは、いかがでしたか。したサッチャー女史との一をに揭しましたが、さらにではりとののをはじめでのンジウのやのをなとともにおえします。くださ。



PPS、AFP、PANA、Geo Howard、CO (Central Press Association)、PA (The Press Association)、BTA、Rush Tour、S. A. Hor

（英国で「ジャパン・フェスティバル1991」を開催中

英国で「ジャパン・フェスティバル1991」が開催されています。ロンドンにあるジャパン・ソサエティの創立一〇〇周年を記念して、この九月から来年一月まで英国各地約二〇〇か所で、日本文化を紹介するための各種イベントが三五〇以上も行われています。

現代日本総合紹介（ビジョンズ・オブ・ジャパン）展をはじめ、初の大相撲ロンドン公演、ロボット技術展、北斎展、小澤征爾指揮による斎藤記念オ

ーケストラ演奏、日本庭園など、日本の伝統文化および現代芸術、科学技術、スポーツなど、これまでにない規模で総合的な日本紹介の行事が繰り広げられています。

このフェスティバルは、サッチャー政権時代に英国側から提案され、日本側が全面的に協力するもので、名誉総裁は我が国からは皇太子殿下が、英国からはチャールズ皇太子殿下が就任されています。



女史の選挙区、ロンドン北部のフィンチリー支部では、さっそく後継者選びが行われ、二三人が申請しました。その中から、選挙区の保守党員選挙によって、弁護士でサッチャー政権の法律顧問をつとめたハートレー・ブリス氏が後継者に指名されました。彼は必ずしもサッチャー女史の意中の人物ではないと言われますが、候補者は選挙区の党員の意向によって決まり、たとえ前首相といえども決定に介入することはできません。

二三年前に、ジョン・クロウダー卿の引退を受けて、若十三歳のサッチャー女史が新人として選挙に打って出たように、今度はブリス氏が選挙に挑



支持政党の候補者に投票

英国の下院選挙は小選挙区制をとっており、各党とも一つの選挙区からは一人の候補者しか出せません。選挙権は十八歳以上の者にあり、原則として選挙区の支持政党の候補者に投票します。

候補者はブリス氏の場合のように、党員の選挙であらかじめ決まっていますから、総選挙の段階では候補者個人を選ぶというよりは、各党が掲げる政策に沿って政党を選ぶという色彩が強いのです。

各党は自分たちが政権を担当することになれば、これこれの政策を実行するという公約を掲げて選挙戦を戦います。こうして選挙は公約と公約の戦いとなり、候補者は所属する政党の公約に忠実であり、また当然それに拘束されます。



選挙キャンペーン中のサッチャー女史。子供の頃から、選挙は何よりも心がとぎれた

候補者の個人的な能力も、もちろん重要です。選挙戦になれば選挙演説や戸別訪問などで、選挙民に自分の党の政策を十分説明できる力量を備えていなければなりません。

さらに反対党の候補者との論戦でも、相手を議論で論破する必要があり、政治家としての本当のプロでなければ当選しないのです。英国はもともと二大政党を前提としてきました。それが、現在では保守党、労働党、そして自由党と有力な政党が三つあり、いきおい各党とも激しい選挙戦を繰り広げることになります。

たとえば、サッチャー首相がひきいて保守党が大勝した一九八七年の選挙では、保守党は総議席六五〇のうちの議席、五八％を獲得し、労働党は三五％、自由・社民連合はわずかに三％しか議席を獲得できませんでした。

一貫した政策実現のためにも小選挙区制が不可欠

もし、比例代表制を導入したとすれば、一九八七年の選挙結果は、保守党二八〇議席、労働党二〇八、自由・社民連合一五〇となり、どの政党も単独では政権を維持できないこととなります。その結果、政党間で連合がなされることとなりますが、各政党はもとより英国人の大多数は、こうした事態を望んでいません。

それは、各政党が掲げた政策はそれぞれ首尾一貫したもので、連合によって政策の折衷が行われれば、整合性が損なわれてしまいます。それを英国人は嫌うのです。政治はあくまで政策と政策の戦いであって、多数を得た政党に公約を実行するチャンスを与えるべきだ、そのための小選挙区制は正しいというのが、大方の英国人の考えなのです。

先のロンドン・サミットでは、四八歳になったばかりのメージャー首相が、ゴルバチョフ大統領を迎えた歴史的な首脳会議で議長の大役を果たし、保守党の人氣が盛り返したと言われます。

サッチャー首相からメージャー首相へと、バトンが渡された英国保守党のありかたは、ヨーロッパやソ連の「八月革命」はもとより世界の今後、大きな影響を与えるに違いありません。